

# 魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 中澤 由紀

所属：神奈川県立津久井養護学校

記録日：2017年 2月6日

キーワード： 地域支援 県立高校との共同研究 思考整理ツール

## 【対象生徒の情報】

○学年：県立高等学校（普通科）2年

○障害と困難の内容  その他

・診断等はないが、主に書きとコミュニケーションに困難さがある。

## 【活動進捗】

○当初のねらい

・自分に合った学習スタイルを探ったり、自己理解したりしていくなかで、自信をもって学習や学校生活に向かえるようになる。

①学習支援

学習スタイルを本人と一緒に検討する。

②生活スキルの向上

ひととのやりとり（社会性）を身に付ける。

○実施期間

2016年6月28日（火）～ 9月28日（水）（全4回）

○実施者と対象生徒の関係

中澤由紀（特別支援学校地域支援コーディネーター）と県立高等学校（地域支援の巡回先）でのケース対象者

## 【活動内容と対象生徒の変化】

○対象生徒の事前の状況

■書くことに関して

・漢字を想起して書くことに苦手さがみられる。

■コミュニケーションやひととのやりとりに関して

・自分の興味関心のあることが頭に思い浮かぶと、一方的にたくさん話したり内容や話題を広げ過ぎたりする傾向がある。

・知識面では社会常識を理解しているが、実際の場面で状況を判断することにやや困難さがみられ、暗黙の了解やルールに対して臨機応変に行動できない状況がある。普段と異なる日課に対応しにくいときがある。

■その他

・YPプログラムの質問紙によるアセスメント結果（2016.7.5実施）では、高自己評価群に該当した。しかし、自身の評価と日常の様子との間に大きな差異が見られることから、生徒自身が自分を客観的にみる力の弱さが

示唆された。また、アンケート内容の回答から教室での居場所、人間関係に悩んでいる様子が見えてきた。日常的にクラス集団で行動することが難しいこともあり、学校で安心して過ごせることが喫緊の課題となっている。

### <ICT 活用に関する現状>

・普段からスマホは主に“音楽を聴くこと、調べること、ゲームをすること”を目的として使用しているようだった。


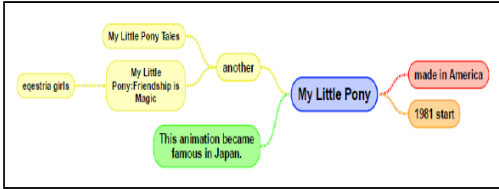
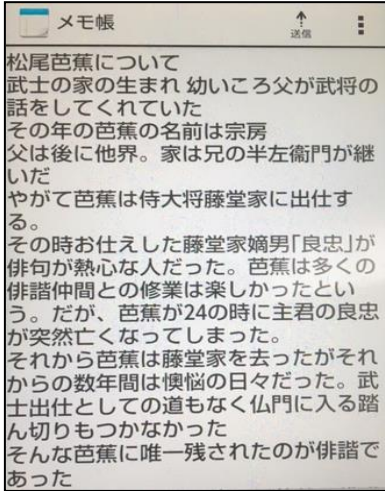
### ○活動内容

セッション内容（巡回相談をセッションと呼ぶこととする）

1. 対象生徒と地域支援 Co のマンツーマンで面談（約 60 分～80 分）
2. 生徒下校後に報告ケース会議（約 30 分～1 時間）
3. ケース会議参加者：高等学校教育相談 Co、担任、養護教諭と地域支援

### 【活動の具体的内容と対象生徒の事後の変化】

#### ①書きに対する支援


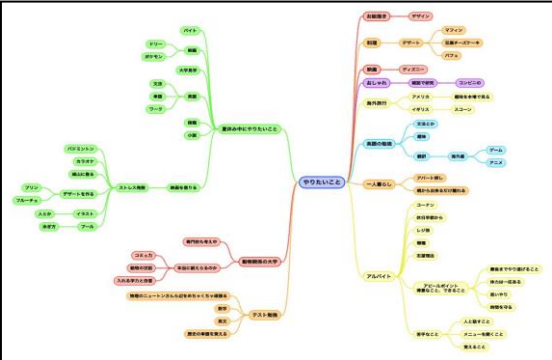
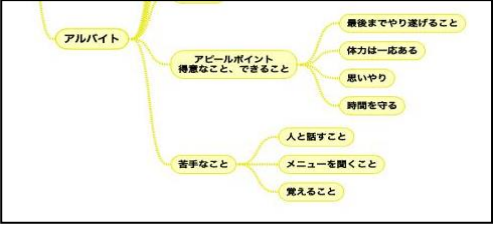
活用したアプリ	支援方法	対象生徒の変化
<p>メモ帳</p> 	<p>・3回目のセッションの際に、生徒の興味のある事柄で作成したマインドマップ（図1）を提示しながら、学習場面でもタブレットが活用できることを提案したところ、「自分でも何かやってみたい」との返答があったため、“自分が調べたいこと”に関するレポートの宿題を出した。</p>  <p>（図1）提示したマインドマップ</p>	<p>・2週間後の4回目のセッションでは“松尾芭蕉（図2）”と“小野妹子”に関する内容をまとめたミニレポートが提出された。</p>  <p>（図2）宿題レポート</p> <p>・「普段の板書ノートからは想像できないほどの漢字を使い、他者が見やすいようにまとめられている」と高校側からのエピソードを聞くことができた。</p>

### ポイント

・漢字変換機能や語彙の後に続く“予測変換”を活用することで、文章表現に関する負担が軽減されたのではないかと考えられた。

②コミュニケーションに関する支援

考えたことを可視化することで、思考整理を支援する。



活用したアプリ	支援方法	対象生徒の変化
<p>SimpleMind+</p> 	<p>・本人の“やりたいこと”をセントラルテーマに設定し、話し合いながら毎回のセッションでカテゴリーを徐々に追加していき、継続的にマインドマップを作成した（図3）。</p>  <p>（図3）やりたいことマインドマップ</p> <p>・入力操作は本人が行い、“考えたことを文字に起こす”ということを約束し、会話をしていくうちに話が広がり過ぎる際には、何が言いたかったのかをキーワードで入力するように言葉をかけた。</p> <p>・2回目以降のセッションではセントラルテーマの“やりたいこと”から直結しているカテゴリーに関して、より具体化していくよう指示した。特にアルバイトをするために、どうすればよいか具体化していく過程のなかで、自分の“強みと弱み”に関する問いかけを行った。</p>	<p>・1回目のセッションでは思いつくままにカテゴリーを追加していた傾向があったが、2回目以降は話し合いながら入力していくうちに、似た内容に関しては同一カテゴリーにまとめるなど、広がり過ぎる考えを自分なりに整理する工夫がみられた。</p> <p>・アピールポイント（強み）や苦手なこと（弱み）を可視化していくことで、少しずつ自分を客観視することができるようになってきた。その後、アルバイトの面接を繰り返し、実際夏休みにはアルバイト（工場のライン作業）で採用され、2月現在も続けている。（図4）。</p>  <p>（図4）マインドマップ：客観的分析</p>

**ポイント**

・自分の考えを可視化したことで、生徒自身の目で確認しながら、似たような内容に関しては同一カテゴリーに整理したり、カテゴリーに関する内容に沿って考えを深めたりすることができたのではないかと考えられた。

②ひととのやりとりに関する支援

自ら見通しをもって行動できる場面を増やす。

活用したアプリ	支援方法	対象生徒の変化
<p>カレンダー</p> 	<p>・セッション日程のスケジュール管理を本人のスマホを使って一緒に登録した (図5)。</p>  <p>(図5) スケジューリング完了設定画面</p>	<p>・7/15に次回のセッション日を登録したところ、夏季休業中にスマホをみて9月の予定を確認する様子が見られた (本人談より)。しかし、9月に入り新学期になった頃にはスマホを確認し忘れ、前日に担任からメモを渡されたことで予定を思い出したとのことだった。</p> <p>・カレンダーアプリは日常的な活用には至らなかったが、本人にとってはスマホの新たな使い方を学ぶ経験となった。</p>

**ポイント**

・本人が日常的に所持しているスマホに予定を入れておくことで、いつでも手軽に確認する (見通しをもつ) ことができた。しかし、長期的な期間が空いた予定については、予定を知らせるアラーム (通知設定) を本人のベストタイミングに設定することで、自ら見通しをもって行動できたのではないかと考えられた。

**【対象生徒の事後の変化】**

■書きに関わる支援を行ったことで

・思考整理の過程において、本人から「iPadで何か文字を入れると、次に続きそうな言葉が出てくるところがいい。」との発言があったことから、紙と鉛筆ではなくタブレットの“予測変換機能”を使うことで、語彙が増え文章力が向上した。

■コミュニケーションやひととのやりとりに関わる支援を行ったことで

・思考の整理を行うことで、生徒自身は自己認知が進み、周囲の教員は対象生徒の新たな一面を発見したり、関わり方を工夫したりする場面がみられるようになった。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

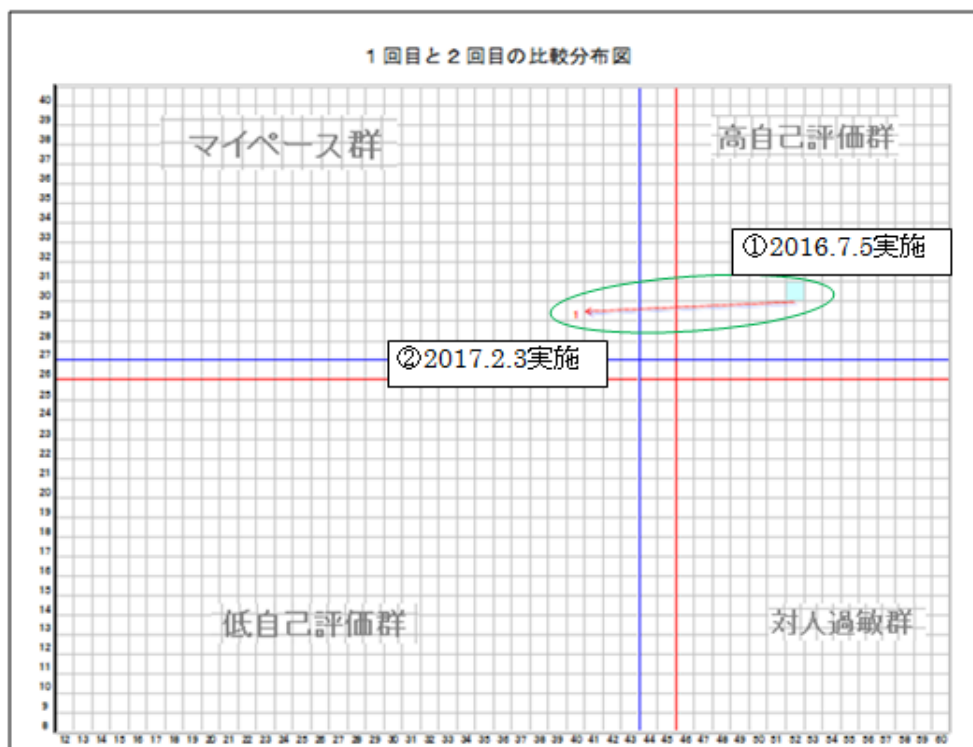
### ○報告者の主観的気づき

・ICTを活用して、自分のやりたい（モチベーションが高い）ことを整理していくことで、思考整理を促し、自分自身を知る（自己理解）気づきを獲得できたのではないかと。

### ○気づきに関するエビデンス

#### 生活スキルの向上を目的とした自己理解に関して YP プログラム結果からの分析

・1回目（2016.7.5）では高自己評価群に所属していたが、2回目（2017.2.3）ではマイペース群に変わった（図6）。1回目に比べ、2回目の結果は、日常生活の様子から概ね予想される結果であった。アルバイトが成功したこと、様々な学校行事、日々の授業に対して周囲の支援を受けながらも全てではないが、乗り越えられた経験などから、自身のことを客観的に捉えたり、「自分には苦手なこともあるけどこれは得意」などといったように、凸凹を受容したりすることができつつあるのではないかと考えられた。



(図6)YP結果

### 【まとめと今後の課題】

・特別支援学校のセンター的機能として高校と連携し、生活スキルの向上と学習支援を目的とした共同研究を行ってきた。結果、生活スキルの向上として話し合いを可視化していくマインドマップを活用したことで、自分自身の得意・不得意（自己理解）への気づきを促し、得意を生かしたアルバイト先（環境）を、自分でみつける“きっかけ支援”が、できたのではないかと考える。しかし、ひととのコミュニケーションに関する支援はまだ不十分だった。今後も生徒自身がひととの関わりのなかで、思考を整理することを習慣化させ、安心して行動できる場面が増えるようになってほしいと考えている。

・学習支援としては、「学習場面にもタブレットを活用してみたい」という気持ちが少しずつ本人から芽生えてきたものの、学びのスタイルが確立するに至らないまま、連携が中断してしまったため、十分な学習支援ができなかった。スタート以前に、高校の授業の雰囲気や評価の方法などを十分把握しておき、学習面における目標を本人と共通理解しておく必要があった。今後も継続して連携し、本人の状況や困難さに応じていつでも介入できるようにし、一緒に子どもたちの多様な学びのスタイルを検討していきたい。